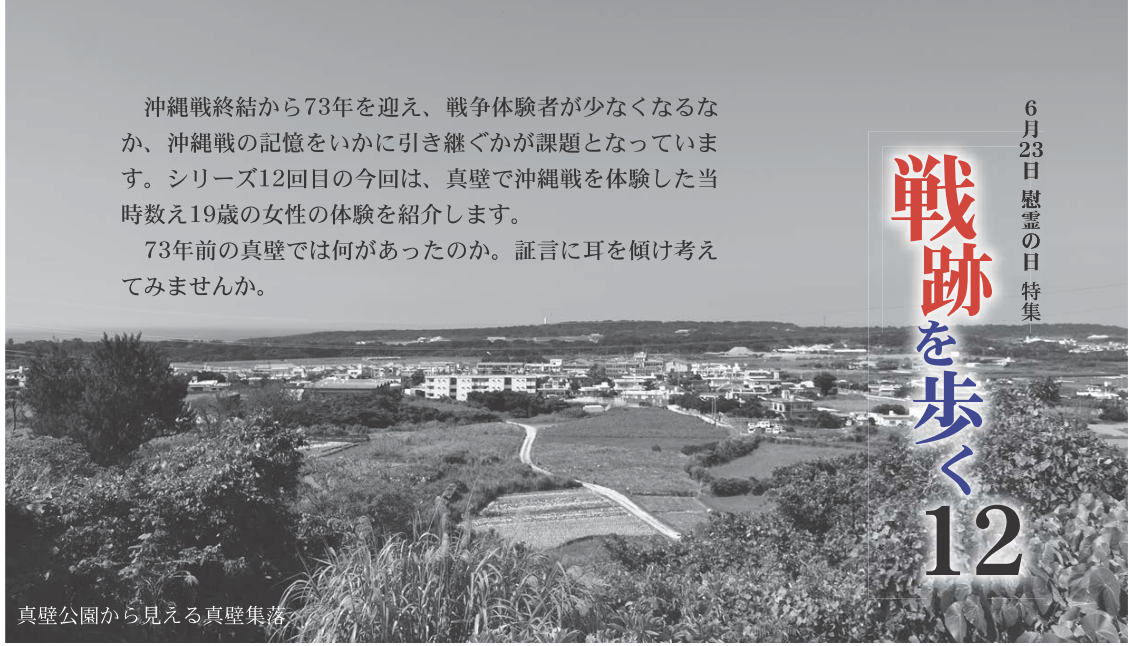
6月23日 慰霊の日 特集

戦跡を歩く12

沖縄戦終結から73年を迎え、戦争体験者が少なくなるなか、沖縄戦の記憶をいかに引き継ぐかが課題となっています。シリーズ12回目の今回は、真壁で沖縄戦を体験した当時数え19歳の女性の体験を紹介します。

73年前の真壁では何があったのか。証言に耳を傾け考えてみませんか。



真壁公園から見える真壁集落

なんで戦争するのか。何が欲しくてかね。
～喜納ツヨさんの戦争体験～

戦争のはじまり

私の家族はお父さんとお母さん、きょうだいが5人いて、おうちは農業をしていたよ。私は真壁尋常高等小学校を卒業してから、実家の畑仕事を手伝っていた。サーターヤーで日雇いの仕事もした。お金がない時代だったから、たくさん働いたよ。

戦争が近づくと、お兄さん2人は兵隊に行った。私は徴用で、小禄飛行場で4、5回、炊事や滑走路造りの手伝いをしたよ。10・10空襲の日も、私は飛行場にいたから、摩文仁の人と一緒に、夜通し歩いて逃げた。怖くて小禄飛行場にはもう行かなくなったね。これが戦争のはじまり。

避難と追い出し

それからは真壁にいたけれど、やがてアメリカーの船が米須の前ン浜のあたりまで来て、カンポーがドンキンドンキン撃たれるようになった。太鼓みたいな、踊りみたいな感じだったよ。だから私たちは、親戚と一緒にアンガーに避難した。アンガーは中に水があるから人でいっぱいで、私たちは入口の方にいたよ。ご飯はおうちに帰らないと作れないから、朝早くにお父さんと一緒に帰ったよ。

この時は戦車断崖といって、アメリカーの戦車を邪魔する石垣を積まされた。区長が毎朝来て、「アメリカーはもう物資がないから、弾がカビダマー(紙の弾)になっている」なんて言うからね、日本は勝つって信じて頑張ったよ。

でも、ある日友軍が来てね。軍に協力する字の人から、アンガーは軍が使うから出なさいと言われた。それからはもう、親戚とはチリチリバラバラ。

中城へ

それから私たち家族は中城に行くことにした。向こうの親戚を頼ってね。与座から東風平、与那原、西原を抜けて、今の成田山まで行った。私は荷物をたくさん持って、お母さんは5歳の妹をおんぶして。お父さんはもっこに荷物を詰めて担いでね。夜中に歩いていると、照明弾がパッとして。苦労して行ったのに、誰にも会えなかったよ。

だからまた夜中に歩いて、すぐ真壁に帰った。帰りは与那原に向かう途中の橋が崩れていて、大変だったよ。どれくらいかかったか、日にちもわからないけれど、一晩のうちじゃなかったかね。

再び真壁で

真壁に戻ると、戦争がますます激しくなっていた。

真壁に着いてから、お父さんが防衛隊にとられたよ。もう歳なのに。首里で亡くなったそうだよ。遺骨も何にもない。

私たちはタージリガマに入ったけれど、軍が病院にするって、怪我人がたくさん来たから、1晩か2晩で出たね。だから私たちは、お父さん方の実家に行った。そこで畳を2枚、もたれ合わせて立てて、弾避けにして横になったんだよ。そしたら、カンポーの破片が飛んできて。庭にいた兵隊が、2人亡くなった。

この破片が弾避けの畳を破って、私も背中に怪我をしたよ。はじめはわからなかったけれど、血で濡れてびっくりした。今でも跡が残っているよ。石油を塗って消毒したけれど、傷口からウジ虫が湧いて。大変だったよ。

シラカーの壕への避難

私の怪我は傷口から汁が止まらなくて大変だったけれど、自分で歩いて、家族と一緒にシラカーの上にあった壕に入ったよ。今はもう壕はないけれど、入口に大きな柳の木があったね。

バラバラになった親戚とも、ここで合流した。兵隊になった下のお兄さんとも、偶然会ったね。ただ、義理のお姉さんは、シラカーで水を汲んでいる時に、弾が当たって亡くなってしまった。その娘も栄養失調で亡くなったよ。

やがてアメリカーはシラカーの周りまで来てね。二世兵が「出て来なさい、出て来なさい」って呼びかけるわけ。余計怖くなって、皆奥に逃げるんだよ。そしたらアメリカーは、大きなホースで、シラカーの水を壕に入れて。首まで浸かるくらいになってね。

そしたらね、私のオバーが言ったわけさ。「イヌシヌナラー、アカガイミーンジ、シヌシェーマシ。ワンウーティクーヨー、ワランチャー(同じ死ぬなら、明るいところで死んだ方が良い。私について来なさい、子どもたち)」ってね。このオバーについて壕から出て、私たちは助かったよ。

捕虜になって

捕虜になってみると、アメリカーは親切だったよ。私たちにビスケットをくれるために、かじって見せたりね。それでも怖かった。GMCに乗せられて、伊敷から真栄里に運ばれたけれど、アメリカーがあちこちでチリを燃やすわけ。自分も焼かれるのかと思ったよ。真栄里から潮平に行くと、知り合いがたくさんいて、この時やっと安心したよ。

私たちはそのあと、宜野湾市の野嵩、山原の古知屋、次に名城に移って、やっと真壁に戻った。私の怪我は、しばらく三角巾で吊っていたよ。その時、着物の袖を抜くけれど、年頃の19歳だからね、肌がみえるのが恥ずかしくてきつかったね。

戦争は本当に大変

戦争が終わって、誰が元気かって話をしたけれどね。ほとんどいない。一緒に遊んだ仲間が、男も女も相当亡くなった。戦争は本当に大変だよ。偉い人は皆隠れて、子どもと年寄りと女、皆亡くなるもの。なんで戦争するのか。何が欲しくてかね。

沖縄戦における糸満市の情報は「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で紹介しています。
問い合わせ 生涯学習課 ☎840・8163

人物紹介

喜納（きな） ツヨさん(90歳)

1927(昭和2)年生まれ。真壁出身。現在は子や孫に恵まれ、地域の知恵袋として充実した日々を過ごしている。これまで家族にも沖縄戦の経験を話すことはなかったが、戦後73年を迎え、その経験を子どもたちや地域に残すため語ってくれた。

戦跡紹介

アンガー

集落北側にある自然壕で、中にカー(井泉)がある。戦時中は多くの人々がここに避難していた。

シラカー

集落南側にあるカー。水量が多く、普段はほかのカーを使う人も、水不足の時にはここに来た。喜納さんが隠れた壕はカーの上にあった。